

◎今のは必ずしも利然らん、義を見て危きを思ひて久命を要するを平授見びす成亦忘生けて人たれと爲るを平見び孔子

文る。斯やうな人があるならば、先づ成人と見てよい。』と答へ、言葉を進めて、『が、それは、成人の理想的なる者で、今の成人は、それ迄に至らずとも、利を見て、義を思ひ、危きを見て、命を授け、久要、平生の言を忘れない者、これが成人ちや。』と說いた。利を見て、義を思ひ、富貴の爲めに淫せられない者は、男子の意氣である。危きを見て、命を授けるのも、勿論、男子の意氣である。久要平生の言を忘れず、萬難の間に初心を執るのも、亦た、男子の意氣である。果して然らば、成人の本領は、意氣に在るか。男子、意氣がなくはならぬ。『人生、意氣に感す。功名、誰れか復た論せん。』（魏徵）である。

こゝに一人、危きを見て命を授けた者がちる、姓は後藤、名は政次、通稱又兵衛といつたのは、元龜、天正の際の勇士であるが、大阪夏の陣の時には、豊臣秀頼に招かれて大阪城へ入つた。そして、

『國府越、暗がり峠へ打つて出て、地の利に據つて軍をする。この外に手段はござらぬ』と建議し、大和口の先鋒を承はつて、平野へと出陣した。

すると、そこへ、徳川家康の使者相國寺瑤西堂が來て、『關東の味方に参るなら、大名に取り立てゝ、播磨の國を取らせやう。』とのことである。當時、關東の勢ひは、朝日の天に昇るが如くで、天下も略ば定まつてゐた。とは反対に、大阪方は、雨夜の星の、あるかなしかの有様で、これに屬するのは、たゞさへ不利益の折柄、この好餌を以て釣られたのであるから、政次たる者、露、異存はなかるべきであつたが、彼には男子の意氣があつた。

で、立派に答へた。

『仰せ、忝くは存じますれど、お味方仕ること、思ひも寄り申さぬ。今、大阪の勢が強くて、關東が危いとなれば、別に所存もござりませう。秀頼公の亡びられること、最早や眼前なる今日、一心を懷いて、それを見捨てるなどは、弓矢執る身の道ではござらぬ。このよし、徳川公にお傳へ下されよ。』毅然として斯ういつ

◎魚のか
眞による
晋書

て、更に言葉を續け、

「これは、お使者へ物語でござる。よく聞かれよ。今日、六十餘州に弓取りは多いけれど、政次に勝る者は、一人もないかと存する。その仔細は、去年以來、政次を待ちに思し召されてゐるのは、高麗迄も攻められた、豊國明神のお世嗣ぎでござる。又た、政次が内通いたさば、天下分目の戦も、容易く片がつかうと仰せられるのは、徳川殿でござる。天下の勝負を政次一人の身に繫けたのは、これ、思い出ではござらぬか。死んでも冥途の面目かと存する。』と、唇邊、得意の笑ひを浮べつゝ、

「政次が生きてゐましたら、一日で破^よらるべき大阪も、十日は支^さへ申さうか。政次討死と聞えたたら、百日保^{たま}つ大阪も、一日で落城^{らくじやう}いたしませう。この上は、政次疾く討死するが、徳川家の御恩^{ごおん}に報ゆべき、せめてもの志でござる。」といつたのを誤^まる道夫^{のうふ}も必らず誤^まる。武夫の生き死^{いき死}にてすばれば、生き死^{いき死}にを脱^ぬれ^ぬる。

4 齊人晏足の道

今の世には、利害によつて去りも就きもする小才子が多い。彼等の眼中には、利あつて義なく、見危授命の道もない。平生の言など、御都合次第、片つ端から忘れてしまふ。そして、それを怜憫なやり方としてゐるのだから堪らない。どこに男子の意氣があらう？　どこに孔子の所謂る成人があらう？

孔子は、その當時を嘆いて、「祝佗の佞ありて、宋朝の美あらずんば、難いかな
今の世に免れんこと。」といつた。大正今日の日本がやはりそれで、剛毅木訥の士
は、大概、世に容れられない。さては、多少、心のある者迄が、權門の犬を學
び、勢家の猫に倣つて、只管、その驩心を求め、處世の妙策、こゝに在りとする
のであるが、抑も男子の意氣を奈何である。

音し齋の國に、一妻、一妻を蓄はへてゐる者があつた。外へ出る都度、酒、肴

に驚いて歸る。妻が、

『誰れとお飲みでした?』と尋ねると、曰く某大官、曰く某將軍、答へとするのは、すべて當世の名士である。けれど、妻は、信じないで、一日、妻に、『主人は、何時も何時も、酒に酔つて歸られる。相手を聞けば、何れも立派な人ばかり。たゞ不思議は、それ等の人の中、一人として、訪ねて來た人がない。』

『眞實ですねえ。』

『だから、妻、一度、跡をつけて見やうかと思つてね。』

『ようございます。然うなさいまし、何も彼も判りませうから。』

乃で、その翌朝、妻が早く起きて、旋めに夫の跡をつけて行くと、途中では、誰れ一人、立談する者もない。やがて、町の東部の墓のある處へ行くと、葬ひの者に、

『何卒、お餘りを……』と乞ひ、

『ないよ。』とはれると、又た、他へ行くといふ風で、何のことはない、正しく乞食の爲である。

妻は、驚き呆れてしまひ、急ぎ、家へ歸ると、この事を妻に語つて、

『主人は、妾たちが天とも仰いで、一生涯、身を託した人ぢやないか。その人が

そんな有様だとは……』

『何て、悲しいことでせう。』と、抱き合つて、中庭に泣いてゐると、主人は、例の如くに醉つて歸つて、得々然と、

『今日は、宰相閣下と飲んで來た。』

今の大貴を求める者は、暮夜、憐みを富貴の人に乞ひ、歸れば、人に白日に傲るといふやり方で、意氣もなければ、氣概もなく、滔々として、皆な、齊人の仲間内である。

これを稱して、「お鬚の庭を拂ふ。」といふ宋の宰相寢準の部下に、丁謂といふが

塵を拂ふ
涙を拭ふ

あつた。官は參政、人にも知らた身であるながら、なかなかの小才子で、準の御機嫌取りに餘力を遣さない風。一日、會食をして、羹が準の鬚につくと、起つて行つて、それを拂つた。準は、同じ宰相の李沆が、「面折、廷争して、素より風采あるは、寇公に如くはなし。」と評した程の、氣骨のあつた人である。準のこの眞似を笑止手萬に心得て、

『參政は、國の大臣ぢやないか。上官の爲めに鬚を拂ふとは……』と冷かした。謂は、甚はだ愧ぢ、且つ、恨んだ。準は、後ち罷められて、遠地へ貶されたが、それは、謂が、中宮劉氏に申し上げて、取り計つた事といふ。謂の一類は、銀行會社、諸官廳、どこへ行つても、ごろごろとる。

5 ハーバー屈辱を忍ぶ

妄りに怒るのは、意氣が旺んなのではない。屈辱を忍ぶのは、氣概がないので

はない。寧ろ、衝天の意氣を屈辱の間に蓄積し、機、到れば、敢然として震天動地的大事業を演じ出すのが、男子らしい光景であらう。怒りっぽいのを、意氣とはいはぬ。宵滅法を氣概とはしない。

紐育のハーバーといへば、世界に響いた大書店である。初代をジエームス・ハーバーといふ。英國愛爾蘭の産である。今を距ること一百年、大志を抱いて、新大陸亞米利加合衆國へ渡ると、紐育へ來て、フランクリン、スクエーアなる一出版業者の家へ、職工として住み込んだ。

然るにその町は、紐育中の目貫きの場處である。大厦高樓、軒を列ね、道行く人は、花の如くに着飾つて、檻櫻を纏つたハーバーの貧乏姿が、悪い意味で人の目を惹いた。服装で人を評價するのは、古今一揆、小人の通弊とする所。當時の米人がやはりそれで、ハーバーを見ると、附近の惡少年共、寄つて集つて侮つてかゝり、陰での惡口位ゐは何でもない。面と向つて、

ヘーバー

◎人には見
られぬもの
の下潛る
古歌

◎人末終に
ともなる
もしき山水
し木の葉ば
るなり

人何ぞ算の
ふるに足算の
孔子

『お、立派な衣服を着てるね。巴里から新形を取り寄せたのかい?』と冷かす者もあれば、

『何と、俺を貴公の仕立屋へ紹介してはくれないか、俺もそんなのが欲しい。』とからかふ者もあり、更に甚いのは、ハーバーに近寄つて、衣服の表裏を改めて、破れ目を見つけては、

『成程、風穴が明けてあるね。』と笑ひ、びろびろ下つた布片を弄つては、
『は、あ、裏にも飾りがついてるね。』

と戯むれなどした。けれどハーバーは、少しもそれに取り合はなかつた。
取り合はなかつたのは、意氣銷沈の爲ではない。氣概の乏しかつたわけでい。
彼の胸のどん底には、衝天の意氣が秘められゐた。一日、水を汲んでゐると、
無頼少年の一人が、背ろから聲をかけて、

『ハーバー君!』と呼び、

『君の名刺をくれないか。』と冷かし顔にいふ。ハーバーは、落ちついた態度で、
その者の方へ向き直り、桶に腰をかけざま、足を擧げて一蹴し、一葉の名刺を、
その顔へ叩きつけて、

『俺の名刺だ。大切にしまつて置け。他日、俺が事業を始めた時、職業を求める
ことがあつたら、その名刺を持つて來い。使つてやるぞ。』といひ放つた。何等の
意氣!

而もこの意氣は、空威張でも、瘦我慢でもなかつた。四十餘年の勤労、その効
があつて、ハーバーが紐育の一金滿家となつた時、彼の名刺を持つて、訪ねて
來た者があつたが、それは、當年の無頼青年であつた。

大に成すあらんとする者は、大に忍ばなければならぬ。一見、意氣なく、氣概
なきが如きの間に、眞の意氣、眞の氣概があるのである。蘇東坡の留侯論に、
古への所謂る豪傑の士は、必らず人に過ぎたるの節あり、人情、忍ぶ能はざ

◎小忍ば
謀を乱る
孔子

◎勇を以て百
動靜ふべく制す
蘇老泉

る所の者あり。匹夫、辱しめらるれば、劍を抜いて起ち、身を挺して戰ふ。これ、勇と爲すに足らざるなり。天下に大勇なる者あり。卒然としてこれに臨んで驚かず、故なくしてこれに加へて怒らず。これ、その挾持する所の者、甚はだ大にして、その志、甚はだ遠ければなり。

と。然り、意氣がないのではない。挾持する所が大きいのである。又たいふ、「夫の高祖の勝つ所以、頂藉の敗るゝ所以の者を見るに、能く忍ぶと能く忍ばざるとの間に在るのみ」と。然り、然り、眞の意氣と僞の意氣との別るゝ所以は、能く忍ぶと能く忍ばざるとの間に在るのである。

6 海鼠の怪氣焰

めつたに意氣張る者、必ずしも意氣があるのでない。やたらに意氣張る者、必ずしも意氣があるのでない。達人、高士など、凡そ人生の眞の意義を徹見し

◎鷹飛ん

で天に戻
り魚淵に
躍る……
時經

し取り落
し取る海
鼠かな
古句

な超脱の士は、如何なる屈辱、侮辱に對しても、怒らず、怨まず、口惜しがらず、たゞ笑つて澄してるので、さも、意氣、意氣がないやうであるけれど、孟子の所謂る、「富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能は」ざる底のそれは、實は、これ等の人ものである。意氣張り屋は與からぬ。

昔し、益徳寺の正損とて、尊き和尚ありけり。一日、齋の戻りに、海邊を通り、海鼠の波に漂ふを見て、歎じて曰く、あゝ、寢たか、覺めたか、尻か、頭か。偶々、受け難き生を受けながら、目なければ、佛像も拜ます、耳なければ、御法も聞かず。口、妙號を唱ふること能はず。漁父來つて、突かんとすれば、逃げんとする智慧もなく、俎に載せられても、跳ね廻る力なし。それども、逃げんとする智慧もなく、俎に載せられても、跳ね廻る力なし。藁に縛られて、一生を終らん。危ふいかな。現世、尚ほ斯くの如し。況んや來世、覺束なしと、回向して歸りぬ。

蓋し和尚は、海鼠の意氣なく、意氣なきを侮つたのである。耳のない筈の海鼠

◎口五つ等保みの坊戒に主をの
は地極な家の古歌

も、この言葉を聞きつけたか。そして些さか痛ずつたか、
その夜、海鼠、和尚の枕に立ちて、歎じて曰く、あゝ、寝てか、覺めてか、
僧か、俗か。偶々、出で難き火宅を出でながら、目ある故、五つの色に迷
ひ、耳ある故、三筋の聲に迷ひ、口、飲酒、妄語を戒しむること能はず、講
中、來つて飲まんとすれども、逃げんとする智慧もなく、乗り物に乗りて
も、自前に拂ふ力なし。借錢に縛られて、一生を苦しめん。小拂ひ、尚ほ斯
くの如し。況んや大陸、覺束なし。危いかな、危いかな、といひ捨てゝ歸ら
んとす。和尚、衣に縋りて曰く、願はくは敷へを受けん。

海鼠、するするべつたり坐り、我れ、天地を以て一字とすれば、勸化、奉加
の世話も要らず、上に本寺なく、下に末寺なく、中に檀那なれば、納豆の
仕入れに氣を揉ます。和尚、我れに耳、目なきを憐れめども、我れ、耳、目
なき故に、講中のねすり言を聞かず、檀那の苦い顔も見ず。口なれば、齋

◎庚申年
の三猿
：怪氣

◎住む所
の知遇に心
して、そじな
に任せぬ
るかなか
無難

米の吟味も知らず。富貴に心なれば、大黒を勸請せず。ころころと丸寝し
て、寒暑の憂ひを知らざれば、お針に氣がねすることなく、在所の姪を呼び
寄せざれば、疑ひ受ける覺えなし。現世すら斯くの如し。況んや煎海鼠に於
てをやと、粗に水流すが如く、疊みかけ疊みかけいふ聲ばかり寢耳に残り、
小疊になつて消えにけり。(脇坂義堂)

面白いかな、海鼠の氣焰！その心境は、超脱の士の心境である。人間、この
心になるならば、富貴、貧賤、夷狄、患難、何もの、如何なる場合にも、泰然、
平然、能く男子の真骨頭を保つことが出来やう。眞の意氣は、寧ろ、するするべ
つたり、海鼠然たる邊に在るのである。

第二十 趣味

1 松尾芭蕉の俳生涯

○小人は心利害につて暗には入世なりと思ふ。されど忙何加はしくは熊澤蕃山。

俗人の大多數は、單に金儲けの爲めにのみ働いてゐる。俗人の俗人たる所以であるが、金を取り去れば、後に何も残らぬといふ人間は、世に卑もししいものであらう。必ずしも高遠なる理想とはいはない。將た、深邃なる信仰とはいはない。人間、多少の風流を解し、多少の趣味を有することは、生活を樂しくする上からいつても、人格を高くする點から視ても、極めて有益な事としなければならぬ。空行く雲、野に生ふる草、天地間に存する一切の物は、裡に無限の趣味を藏してゐる。たゞそれを解すると否とに在るのである。

有名なる俳人松尾芭蕉、名は宗房、伊賀の產である。初め、津の藤堂氏に仕へ

たが、主侯の夭折に會して、世の無常に感すること切に、隱遁の志、止み難きの結果、窺かに脱藩して、北村季吟の門に入り、俳諧を學び、終に正風の一派を開いた。後ち剃髪して、深川に卜居した。その居を芭蕉庵といつた。有名なる、古池や蛙飛び込む水の音。

の一句は、芭蕉庵での一日、口を衝いて出たものである。國學、漢學、學ばぬ所はなく、又た、佛頂禪師に参じて、禪の宗趣を究め、老莊の學に通曉し、餘技としては、繪をさへ善くした。旅行を好み、足跡、海内に遍ねしといふ風で、元禄七年、大阪で客死したが、これも、旅行の途次であつた。

死ぬ時、人が、

『御辭世は……』と乞ふと、

『年來、讀んだ句は、皆な、辭世ぢや。』

と答へ、更に一句、

松尾芭蕉

旅に病んで夢は枯野を駆け廻る。

芭蕉は、全然、趣味に生きて、趣味に死んだのである。

退いて、芭蕉の心境を察するに、彼は、無我の人であつた。無我の人であつたればこそ、能く自然の懷ろに抱擁せられて、その趣味を解し得たのである。左の大聲を發する所以なり……大體後素

掲、「行脚の綻」を見れば解らう。

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。すべて、物の命を取ること勿れ。

一、衣類、器財、相應にすべし。過ぎたるは善からず、足らざるは惡し。

一、人の求なきに、己が句を出すべからず。望みに背くも、然るべからず。

一、好んで酒を飲むべからず。饗應によりて固辭し難くとも、微醉にして止むべし。

一、他の短を擧げて、己が長を現はすこと勿れ。人を誇りて己れに誇るは、甚はだ卑しきことなり。

一、生ある物は、一枝、一草をも取るべからず。山川、江澤にも主あり。
一、山川、舊蹟、親しみて尋ね入るべし。新たに私の名をつくること勿れ。
一、一字の師恩たりとも忘るゝこと勿れ。一句の理をだも解せずして、人の師となること勿れ。人に教ふるは、己れを成して後の事なり。
要するに、「無我なれ。」といふに在る。自然の趣味を解することは、無我の人のみの有し得る特權である。叨りに我れを主張し、身最負、身勝手のみを思ひ、私心、私慾を以てその頭を充してゐる者に、趣味の解せやうわけはない。無我は、道徳の大本であつて、そして趣味の源泉なのである。

2 鹿の鳴音

右いふ通り、趣味を解することは、無我の人の特權であるが、俗人も、時には無我の境地に入り、從つて、時には趣味を解する。悲しいかな、根が俗人である

れば天地
皆聞づ
春日齋
庵

だけに、それが一時に止まつて、忽ち本來の有我に歸り、索然たるものになつてしまふ。

これに就いて、面白い話がある。秋も夜寒になつた頃、商人五六人、誘ひ合せて、鹿の音を聞きに、或る山寺へ泊りかけの遊びに出かけた。客殿を借り受け、鹿の音を待つ間、酒を始め、歌を作る者もあれば、詩を捻る者もあり、俳句を考へる者もある。差いつ、押へつ、もはや、夜も更けたけれど、聞えるものは谷川の水、松吹く風の音ばかり！

『もう、鳴きさうなものですね。』

『眞實！』といつてゐる中に、そろそろ睡くはなつて来る、一同、默然としてゐると、五十ばかりの男が、盃を前に置いて、

『今晩は、皆さんのお蔭で、ゆつくりと、まことによい樂しみをいたしました。けれど、家内の者が、相變らず、氣を揉んでゐるだらうと、ふとそんなことを思

苦の好きな親の異見と茄子の花は、子に一つも無駄はない
俗謡の歌堂

ひ出して、酒が理に入りさうでございます。』と、悄然としてひ出した。座中の者は、

『何うした理由で？……』と驚いたやうにいふ。

『いや、お聞き下さい。御存じの件、當年、二十二歳になりますが、實に何うも困つた奴で、私が家に居れば、しぶしぶでも、店の用を手傳ひますけれど、然うでないと、尻に帆かけて廓通ひ！ 親類なども、いろいろ、いひ聞かせてくれますが、一向、はや、「馬の耳に念佛。」でございます。あんな者に身上を渡すことかと思ひますと、實以て心細いわけ。お蔭で、何一つ不足のない私の身分ですけれど、子供の爲めに、毎日、毎夜、血の涙でございます。』

すると、傍から四十四五の男が、

『否々、貴方のは、御難儀といひ條、御子息の爲で、詰めもつきます。私共は、近年店の者が、左右、引負をしまして……』と奉公人に就いての泣言をいふ後を

受けて、又た一人が、

『それはまだしも、此方共は、得意先が片つ端から倒れまして、實に、氣の減る心地でございます。』としよげる。

續いては、隅の方に坐つてゐる老人が、扇をばちばち鳴らしながら、

『然し又た、親類、縁者どもから、金の無心をいはれたり、印形を頼まれたり、家内連れの居候なども、随分、困つたものでな。』と半分いはせず、隣席の男が、『否々、皆さんの御心痛は、すべて榮耀といふもので、私の辛い事といつたらございません。何うしたわけか、母と家内との仲が悪くて、日がな一日、牛の角突合といつた風で、家の中が燐ぶつてしまひます。仕方がない、家内を離縁しやうかと思へば、何分、幼さい者が一人もある。仲裁をすれば、家内の最負をするといつて、母が心持ちを悪くする。家内を叱れば、他人だと思つて、妾ばかりを邪魔にすると怨む。いやもう、中に立つた柱で、辛いの苦しいのと、いひやうもござ

ざいません。』と互ひに脇をさらけ出して、何の事はない、泣言の陳列會である。

すると、一人が氣がついて、

『ほんに、もう、鹿が鳴きさうなものだ。話に身が入り過ぎて、聞き洩らしたわけでもあるまい。』と椽の障子を開けると、大きな鹿が、庭前に默然としてゐる。驚いて、

『何だ、そこにあるなら、何故、先刻から鳴かないのだ？』

鹿は、抜からぬ顔で、

『否、私は、人間の泣くのを聞きに來たので……』

何故泣言だらう？畢竟、頑固に我れを主張し、身最員、身勝手な心から、出來ない事をも仕終せやうとするからである。そんな心では、鹿の音を聞いた所で、その趣味の解せやうわけがない。趣味を解しやうとなれば、一時だけでも、無我の人にならなければならぬ。

3 松平定信の風流箴

◎一竿に老ぬは南湖の風月に遊ぶに。(題)

松平定信の事は、前にも記した。晩年、樂翁と號し、花鳥風月を友として、一生を終つたのであるが、その眼に映じた天地間の事々物々、一として趣味を藏せぬはなく、風流の種ならぬはなかつたらしい。左を讀めば解る。

一、夜更けてことゝふとも、初時鳥、雁は、必らず疎くすべからず。

一、枕に通ふとも、科なきものは、花の香、遠寺の鐘。霜夜の虫の音は、殊に憐れむべし。

一、憎くとも恕すべきものは、花の風、月の雲。

一、野分の朝の庭の面ならで、亂るゝを恕るすはあらざるべし。

一、月は、何時とも親しむべし。然れど、過ぎし世を慕ふも苦しく、行末を思ふも憂し。たゞ向ひてこそあらま欲しけれ。

◎月見れば千々悲しきれしけれ

我の秋身に西ねに一
行ど

上葉し庭雨の露の草さ
ばしに過るる夏の夜宿の古歌

- 一、あるもなきに劣る物は、誠なき人、女の才、稻妻の影、逢ふと見し夢。
- 一、憂てきものは、水無月の鶯、落葉の風に騒ぎたる。
- 一、多きを忌むものは、茶器、酒の肴、遅櫻、龍丹の花、時鳥、蛉虫。
- 一、よきはよく、惡しきは惡しきものは、病める女。風流も、その中なるべし。我が程を知り、爲すべき事を爲してこそ風流ともいはめ、強ひて古へを好み、月花を賞づるとも、爭で争で。終夜、月を賞づるより、日を惜しむに如かず。
- 一、埋れてをかしきものはあらず。然れど、子の日の小松の、夏草に隠れるのみこそ。
- 一、思ふに違うて嬉しきものは、五月雨の雲間の月、葉月十五夜の晴れたる、人の子の幼なきと思ふが、何時か書読み、歌詠みたる。
- 一、疎むべきものは、歎きいふ人、他所見ぬ理屈、午祭りの鼓の音、蜘蛛の

歌なせ枝てにな○
枝てに匂櫻梅
し咲柳はのが
古がかのせ花香

る、足駄の趾、雀、猫、鼠、猿。憎むべく打ちも殺しつべく思ふは、蠅、蚊、畫出づるは殊にこそ。

一、貴ぶべき者は、人に異なる人。貴ぶまじき者は、人に異なる様の人。

一、消ゆる時を恕して、雪を見、雪の月を思ひて、夕立に逢ふべし。

一、梅が香を、桜の花、柳の枝などとは、思ふまじきなり。花の紅、柳の綠、心を別けて樂しむべし。

一、足れりと思ふべきは、我が身、足らずとすべきは、勤むべき道。

一、樂しきと思ふが樂しきの本なり、爭で外に求むべきと、樂しむ翁いふとぞ。

自然界の事物が、一旦、趣味を藏してゐることは、斯くの如くである。而も、全篇を通じて、無我の心持ちが認められる。月は、何時とも親しむべし。然れど、過ぎし世を慕ふも苦しく、行末を想ふも憂し。たゞ向ひてこそあらま欲しけど。

れ。」といひ、「消ゆる時を恕して、雪を見、雪の月を思ひて、夕立に逢ふべし。」といひ、「梅が香を桜の花、柳の枝などとは思ふまじきなり。花の紅、柳の綠、心を別けて樂しむべし。」といふ、皆それである。

4 隠居の癖性

風流を歎び、趣味を解する程の者は、何事に就けても、無我の心持を失はず、温情を以て人に對すべきで、風流を談する口で、無闇に妻子を叱つたり、趣味を説く口で、奉公人を怒鳴りつけたりするのは、矛盾の甚はだしいものとすべく、まことは、没風流、没趣味の人間なのである。

或る隠居、茶が好きで、二疊臺目の席を建てた。搔込天井に突上窓、宗匠の好みとあつて、至極、ざんぐりと出來上つた後では、疊屋が疊を入れる。表具屋が腰張りをするやら。障子を張るやら、それも手離れになると、茶事にのみ使ふ下

女、廻つて、
斬者にいひつけて、叮嚀に掃除させ、さて、
隱居の檢分となる。それがなか
なか難しいので、袂から虫眼鏡を取り出し、障子の棟の隅々を、穴の穿く程覗き

『これでも掃除が。汚い！ 汚い！ 何う客がなるものか。俺の居間にある掃除道具を持つて來い。俺がする。いや、や、ら、明かぬことぢや。』と叱りつける。廻者は赤い舌をそつと出して、

「はい！」とばかり、所謂いはゆ掃除道具さうじだうぐを取つて来る。竹を細く削けずつた魚串様うなぎじやのものが一本、絹雜巾きぬざっきんが一つ、寒竹かんちくの小さい火吹竹ひふきだけが三本、珍らしい掃除道具さうじだうぐではある。

隠居は、先づ、魚串の先へ絹雑巾きぬざよきんを卷いて、障子の横棟よこごんを一本づつ叮寧ていねいに拭き、隅々は、彼の寒竹かんちくの火吹竹ひふきたけで、

吹き終ると、

『やれやれ、これで氣が済んだ。』と、席の眞中に座を占めて、煙草盆引き寄せ、灰吹きを叩きながら、上下、左右を見廻すと、折柄、夕暮近い頃で、突上窓から日が射し込む。隠居は、何を思つたか、顔を蒼め、聲荒々しく廻者を呼んで、『横町の桶屋へ行つて、榦の一番鹽を取つて來い。』と命じ、廻者が心得て取つて

「これッ！　其邊に置くな。井戸側そちらへ持つて行つて、切藁きりわらで、内も、外も、底廻りも、くつきりと洗あらつて、隨分綺麗きれいな水を汲み込んで、長吉と手昇てあきにして、この櫛打ちの上へ、そつと持つて來るのぢや。』と命じる。廝者は、

呼んで、
『竹よ、俺の居室に、新らしい朝鮮團扇がある。取つて來い。』といひ、取つて來

◎楊子
を渡ふ
電箱の隅
便詮

ると、隠居は、やをら、双肌脱ぎになつて、しがつ、べらしく團扇を提げ、鹽の水へざんぶりと突き込み、零の滴るのを、彼の日影の中へ入れて、上げたり、下げたり、招くやうな手つきをする。下女や廝者は、不思議でならない。

『まさか、氣が狂れたのぢやあるまいが……』と思ひながら、氣味悪々、『御隠居さん、何をなさるんです?』と尋ねると、隠居は、『喧ましい。日射しの中に、細かい埃が見えるぢやないか。それを除る分別ぢやと思へ。』腹立ち聲で答へたとか。

驚き入つた瘡症病み、平素の氣難かしさが想ひやられる。家内の者は、頭上、引切なしに鳴る雷に、毎日、頭痛鉢巻きで暮してることだらう。畢竟、我が儘勝手の了簡が亢じて、こんな瘡症病みになつたので、隠居に、茶事の眞趣味が解るか、否か。

5 表太の奇行

昔し、漢の蘇武が匈奴に囚はれて、苦節を守つてゐると、降將李陵は、

『人生は、朝露の如くに儻ないものぢや。貴殿は、自分で自分を苦しめられるので、實に詰らぬ。拙者同様、この國へ降つて、富貴を求められては如何?』と忠告した。不忠不義、惡むべしであるが、名利の途に徨々として、片時も肩を休めることを知らない俗物の爲めには、この語、反省の料でなければならぬ。趣味を解する者の爲めには、人間到る處、快適の地があるのである。

貞享、元祿の間、京都新町四條の北に、太兵衛といふ崎人があつた。表具師を業とし、人は、表太とのみいひ習はした。老いて後には、男の子が三人あつて、それぞれ、家を持つてゐる許へ、一晩づつ泊つて歩き、夜が明けると、野山に交りつゝ、春の花、秋の紅葉は、いふも更ら、月の夕、雪の朝、一日として怠らな

◎人生
の行
み樂せ
人生は
富んは
貴を待

◎人生
の如
何ぞ
久しく
自ら苦
ること此
なる
漢書

かつた。だから、花の消息などに通じたことも人一倍で、何の時ぞ揚擲を

「どこの花は、何時頃、咲きませうか。」と尋ねると、

『然やうさ、この何日頃でせうよ。』と答へる言葉が、必らず適中して違はなかつた。四季共、黒い頭巾を冠り、身の丈に餘る杖に仕込んで肴を入れ、瓢箪状の銀の器に酒を入れ、長々と提げて、腰を二重にして歩いた。或る年の春、仁和寺の邊で驟雨に遇ひ、誰れも、彼れも、逃げ惑つて駆け走る中に、表太のみは、極めて長閑な面持ちで、

『降るは春雨……』と歌ひ、悠々然、常の如くに歩いた。花の下で、たゞ一人、酒を飲みながら、眼鏡をかけて往来の人を見、又た、何か書いたものを携へ、木の枝にかけて友とした。當時、京都畸人の第一名であつた。

その戯詠に、

世は澄めり我れ一人こそ濁り酒、醉ゑば寝るにてさうらうの水。

以て、その酒脱を見ることが出来やう。又た、書畫の鑑定にも長じてゐたのこと。

表太は、市井の一商人に過ぎない。而も、その行動の風流さ、月花の趣味を解した所など、想つて優しい心地がされる。人間幸福の一要素、又た、存してこれら等の邊に在るのである。

6 文晁の鶴

式金の大部分は、人格の低劣な、士人の齢ひすべからざるものとせられ、識者の間には、殆んど穢多的に扱はれてゐるが、こゝに不思議は、彼等が頻りに、書畫、骨董の類を買ひ入れる事である。彼あした俗物に、書畫、骨董の趣味が解るだらうか。恐らく解るまい。彼等は、たゞ、金のあるに任せて、家の飾りだ、位の考へで、得體の解らぬ品を、どんどん、買ひ入れるのである。

◎病に小
部判：怪

だから、時々、滑稽な話がある。或る書畫屋、俗に旦那筋の成金から、この程、五六點、買ひ入れた品がある。見に來てくれとのことに、

「では……」と行つて、座敷へ通され、暫時、主人を待つ間、床の間を見ると、文晁の鶴がかゝつてゐる。筆勢から何からが、何うやら眞物らしい。所へ、

『入らつしやいまし、お茶を一つ。』と女中が、備める。

『はい、あり難う！ 立派な御普請ですね。』

『否……まだ、大工が毎日入つてゐるのですよ。』

『然うですか。』と再び掛軸を見て、『文晁は、いゝですなあ』といふと、女中は、『あら、貴方、文鳥ぢやないでせう？ 鶴でせう？』驚き顔にいふ。骨董屋は、思はず知らず、

『あは、、、。』と高笑ひ。女中は、

『何ですか？』と、ちろり、此方を見て、立ち去る。その後姿を見送りながら、

又も、

『あは、、、。』と笑ふ折柄、主人が出て、

『何だ、何だ？ 女中に何かからかつたのかい。』

『否、私が、今、あの掛軸を見て、文晁はいゝ、といひますと、ありや、文鳥ぢ

やない、鶴だつてわけでは。あは、、、。』

主人の成金、同じく、

『あは、、』と一笑して、『仕方がないさ、女中だもの。鶴と文鳥とは、嘴で分るんだけれど……』との言葉に、世辭家で通つた骨董屋も、流石に返辭が出来なかつたとか。

これは、無論、一場のお笑ひ話で、ほんの悪口に過ぎないだらうが、成金の沒趣味は、大抵、こんなものである。天下の名器、珍品が、彼等の玩弄物になり、藏の中へ收まつて、再び世に出ないことを思へば、可惜の極みである。無心の器

◎病に小
部判：怪

◎病に小
部判：怪

物にも、やはり、遇、不遇があるか。抑も、當世流行の成金は、趣味の賊といはなければならぬ。

◎利を見
子ふ
義を思
孔子

◎異は三

第二十一 貧富

1 僧桃水の快生涯

富貴を望んで、貧賤を厭ふのは、人情、已むを得ない所ではあるが、然し今の人は、甚はだし過ぎる。孔子は、「不義にして富み且つ貴きは、吾れに於て浮雲の如し。」といつたが、今的人は、富貴を求めるに於て、決して義と不義とを問はない。自ら好んで富貴を捨て、貧賤のどん底、乞食の群へ投じ去つた桃水和尚の風を聞いたら、彼等は、驚いて逃げ出すも知れない。

僧桃水、諱雲闡、筑後の國の人である。肥前の國島原の禪林寺に住持する中、一朝、感ずる所があつて、跡を隠して後は、久しく行方を知る者がなかつた。日頃、和尚に歸依してゐた尼の一人は、それを悲しんで、方々、探し廻つた末

に一り生れ教師れす。ふるること。の如く。のをへ君れ。故族養ふ。これに事共ふ。これに事。

に、京都東の四條河原で、圖らず和尚に邂逅つた。和尚は、身に蘯を打ち破ぎ、同じ状の乞食の病人を、自身、介抱してゐたのである。尼は、涙を流して、拜をして、背負つた寢具を取り出して、

「これは、妾が、手づから紡ぎ、且つ、織つた品でござります。何卒、お納め下さいまし。」

和尚は、見向もせず、

「今の身には、用がない。要らぬ、要らぬ。」と断つたが、尼も然る者、御不用なら、左も右も遊ばせ。一旦、供養いたしました上は、お捨てになつても、お恨みには思ひません。』と、強つて進めると、

『では……』と受け、彼の病人に着せた。それを見た乞食仲間の者は、『これは、凡人ぢやないぞ。』といつて、俄かに和尚を崇め出した。和尚は、それを煩さく思つて、その儘、他へ立ち去つた。

時に、弟子の兩僧も、尋ねること三年に及んで、これは、京都の安井門前で、乞食の群に混つてゐる和尚を目つけ出した。そして、和尚の後に従いて、人のゐない處へ行くと、

「何卒、寺へお歸り下されませ。」と乞うた。けれど、

「否、斷じて歸らぬ。」との言葉に、

「では、私共も、同じ状になつて、お側にゐませう。』といつたが、和尚は、それをも許さなかつた。

乃で、二人の一人は、和尚の指圖によつて、他の知識の許へ行つたが、今一人は、
『是非、お側に……』と固く乞ひ、去らうとしない。和尚は、已むなくその言葉を容れ、

『では、先づ俺のすることを見よ。』といつて、併れて行く先には、乞食が一人、

死骸になつて倒れてゐた。

死骸になつて倒れてゐた。
『さ、これを埋めるのちや。』

「はい、畏こまりました。」と、手傳つて死骸を取り片づけると、和尚は、その乞食の食ひ餘した物を、自身、先づ食つて、

「お前も何うぢや？」

「頂きませう。」と答へて、一口、口へ入れた切り、臭くて穢いのに胸を悪くし、吐き出してしまつた。和尚は、眉を顰めて、

『見よ、お前は、この境界に堪へられぬのちや。』といつて、又も行方不明になつてしまつた。

その後ち、肥後の國熊本の某寺の住持が、太守細川侯を大檀那とした所から、儀衛を盛んにし、勢ひ猛に、關東へ行く途中、近江の國大津の驛で休むと、馬士の一人が、

『爺よ、草鞋を呉れい。』と呼び立てる。日頃、左ある家の軒の差しかけ小屋に住む老人の造る草鞋が、馬士、輿丁の間に、爺の草鞋、爺の草鞋と、大層持て難されてゐたのである。聲に應じて、

「あいよ。」といひながら、草鞋を提げて、小屋を出た件の老人を、鶴籠の住持が見ると、紛ふやうなき桃水和尚である。住持は、元と、和尚の弟子。驚いて、鶴籠を轉び出ると、手を執つて、

「お懐しうございます。」と涙を流した。
昔語りなどをして、いざ別れるといふ時、

『お前まへ、大名に酔ゑふなよ。』と告げ、その儘まゝ、大津さを去つた。

そして、京都の片邊りに一小屋を借り、僧形に返り、行脚してゐると、彼の有名な角倉了意が、和尙の徳を見知ることがあつたと見えて、強つて請じて、供養したいといつて來た。和尙は、かぶりを掉つて、

◎ 嘘も方
謊
便

「愚僧は、人の供養を受けることを好みませぬ。」と辭退した。了意は、一と思案の後ち、

『手前の家は、家内が多いので、毎日、澤山の残飯が出来、それを皆な腐らしてしまひます。勿體ない事ぢや。それを上げますから、酢に造つて、お賣りなさらぬか。御老體で、托鉢して歩かれるよりは、樂でせう。』と欺いた。和尚は、それを眞に受けた、

『成程、捨てる物なら、拾ひませう。それは結構ぢや。では、愚僧は、今後、酢賣りの阿爺になりますぢや。』と答へ、それよりは、京都の北の鷹峰に移り、酢屋道念、又は、道全と自稱して、年を経る中、天和三年九月、その快生涯を終つた。遺偈に、

七十餘年、快哉。屎臭骨頭、堪^レ作^ニ何用。嘆。真歸處、作麼生。鷹峰月、白風清。

(七十餘年、快なる哉。屎臭の骨頭、何の用をか作すに堪へたる。嘆。
真歸の處、作麼生。鷹峰の月、白風清し。)

又た、乞食をしてたる頃の口號みに、

如是生涯如是寛。弊衣破椀也閑々。

飢餐渴飲只吾識。世上是非總不干。

(如是の生涯如是寛し。弊衣破椀也閑々。飢ゑては餐し渴しては飲む

を吾れたら識る。世上の是非總べて干からず。)

・大津で草鞋を賣つた時分、或る人、その老を憐れんで、大津繪の阿彌陀如來の像を贈ると、

狭けれど宿を借すぞや阿彌陀殿、後生頼むと思し召すなよ。

以て、その境界、その心術を想ふべしである。

富貴を捨て、我れから乞食の仲間入りをするなどは、極端な話で、無論、學

◎我に富貴は
すすめが願ひ
すすめ帝鄉は期
すすめからう
潤明

ふべき事でもなければ、學ばるべき事でもない。たゞ、めちやめちやに富貴を希
ふ今の人は、古へ、富貴を見ること糞土の如き心得でゐた人のあつた事實を顧み
て、富貴以外、人間、別に天地のあることを悟るべきである。

2 火中の綿服

論語二十篇、要するに、平氣であるよとの訓へてある。貧富貴賤に對して平氣、
毀譽褒貶に對して平氣、吉凶禍福に對して平氣、その他、一切の運命に對して平
氣である。これが論語の要旨とする所で、これを能くする者、これを稱して仁者
といふのである。

所が俗人は、なかなか、平氣であるられない。貧富に對して、最も平氣であるられ
ない。平氣であるられない所から、窮して濫し、慾の罠にかかるやうな、飛んだ失
敗を演じ出す。

些と足りない。そして、極めて貧しい男があつた。或る親切な人から、一枚の
綿服を贈られ、それを着てみると、世間の人が、

『おいおい、お前は、元と、大盡つ子ぢやないか。何だつて、そんな木綿物を着
てるんだい？』

『第一、お前には似合ないよ。』などとからかふ。男は、つひ、その着物が可厭になつた。

すると、悪戯者があつて、

『お前に、縮緬の衣服をやらうか。』といふ。男は、目を圓くして、

『何卒、願ひます。私は、着てこの衣服が、可厭で仕様がないけれど 着替へ
がないので、我慢してゐるんですよ……眞實、くれますかね？』

『やるよ。俺のいふことを聽けばね。』
『聽きますとも。』と力を入れる。

孔由るて者を衣る◎
孔子かは恥と衣て縕敵
そち立たる狐泡れ
れざちる貉なた

◎全世界を得し魂も若し魂を失はし得る世界の益をあらん書聖

「ぢや、その衣服を脱げ。そして……」と前なる焚火を指さして、『この中へ放り込め。その衣服が焼けてしまふと同時に、そこから、縮緬の衣服が出て来る。』と欺くと、男は、その言葉を疑はないで、早速、衣服を脱ぎ、火の中へ投じた。衣服は、忽ち灰になつた。けれど、たゞ一杯の手巾さへも出でては來ず、一張羅を失くして、冬の三個月を、寒さに顛へ暮らしたとの話。

まんまと慾の罠にかゝつたのである。この男が、若し、粗服に甘んじ、平氣であることが出来た位ゐなら、この失敗はなかつたであらう。これを一場のお笑ひ話と聞いてはならぬ。貧富に對して、平氣でゐられない、世の俗人は、慾の爲めに、衣服よりも、何よりも貴い、魂を失ひつゝあるのである。

3 一祚梨一の清貧

今のは、宜しく貧富に對するその態度を一變すべきである。富貴は、成程、

樂しいであらう。けれど、心の持ち方一つで、清貧の間に、より多くの樂みがある。孔子は、疏食を喰ひ、水を飲み、肱を曲げて枕とす。樂み、亦た、その中に在り。』といつたが、至つた人は、富にも樂しみ、貧にも樂しむ。貧富の運命から高く超脱してゐるからである。

一祚梨一は、江戸の人である。清廉な人の常として、家は、極めて貧しく、たゞ書物のみを、夥しく藏してゐた。凡そ、世間の俗事を省き、外見、外聞を厭はず、隠者の風があつた。越前の國丸岡の有馬侯は、梨一の名を聞いて、『何と我が藩へ來ては呉れぬか。』といひ入れた。名利に意のない梨一は、固辭して、受けなかつた。使者は、詐はつて、

『丸岡に、一軒、荒屋がござる。それを下さる筈。又た、何程か祿を賜はつて、而も、勤仕には及ばぬとの仰せでござる。』
『今迄通りにお置き下さる?』

◎讀ひて

一祚梨一

富なる身
よりも詔身
はで、黄詔
しき身こ
そ心安け
れ古け

『然やう、然やう。』との言葉に、梨一は、漸く納得して、
『では、お望みに任せませう。』と、こゝに丸岡へ下つた。

儒者としての招聘である。時々、物を語はれはしたが、一度も、出仕といふことはなくて、三年を経た。候も、

『もうよからう。』とあつて、梨一に、儒書の講義を命じた。梨一も、多年の厚恩を顧みては、可厭ともいへず、命に應じやうとしたが、脇差のみで、帶すべき刀がない。

『如何いたしたもので?』と當惑顔にいふと、使ひの士は、

『何、いと易いことでござる。御心配には及び申さぬ。』と、早速、その佩刀を贈つた。梨一は、それを帶して出仕した。清貧の状、察すべしである。

斯やうな心から、俳諧を好んで、人にも知られた。もとの水と題する著書があつた。又た、芭蕉の奥の細道を註したものもあつた。京都の蝶夢法師は、梨一の

◎花鳥風
月一とし
て俳諧な
らねばな

林一茶
し……小
◎三巡苑
もに就けど
も春せり
陶淵明

俳友である。或る時、伊賀の俳人桐雨と共に、梨一を訪ねたが、容易に目つからぬ。聞いた邊りを、そこ、こゝと捜し廻ると、家も疎らに、人に問ふべくもない處に、一軒、築地が崩れて、犬の通ふ穴の明いた家がある。その穴から覗いて見ると、庭には、得も知れぬ草木が生ひ茂り、人氣もなさうに見えて、而も、儀物などが澤山積んである。

『こゝらしいな。』と察知して、つと入り、案内を乞ふと、

『おう!』と答へて出て來たのは、果せるかな、梨一であつた。隱土的の清貧生活が偲ばれる。

けれど、梨一は、全然の隱士ではなかつた。或る時、越前の國の兵庫といふ地の代官となり、秋收を聞くことがあつたが、百姓等は、梨一の正直なこと、無慾なことに感心入り、それを徳として、梨一の歿後、一小祠を營み、梨一明神と唱へて、その像を崇め、秋毎に祭つたとのことである。

富貴以外に樂地を求めて、清貧の狀、梨一の如くであるならば、蓋し、君子の人に近い。

4. 狸の化け損ひ

前にいつた、今のは、宜しく貧富に對するその態度を一變すべきである。富むことを名譽として、貧乏を恥ぢのやうに心得てゐるなども、誤解の甚はだしものでなければならぬ。人の價値は、貧富によつて決まるのではなく、實に、人格の如何、品性の如何に定まるのである。

貧乏を恥辱と心得る者は、その貧乏を蔽ふ爲めに、種々、外見を張らうとかゝる。そして、忽ち尻尾を出すから可笑しい。

昔し、或る處に獵師があつた。志の年忌に和尚を招き、佛事も終つて、布施の金を出さうと、財布を捜すと、これはしたり、鑑一文の錢もない始末に、何うし

たものかと、困り果てた折柄、庭の片隅を見ると、蟄ねて生捕つて置いた狸が、十重二十重に縛られて、觀念の目を瞑つてゐる。獵師は、じつと見やりつゝ、何を思ひついたのか、それへ立ち寄つて、

「あい、狸！」と聲をかけ、狸が、はづとして、

「はいはい。」と目を開くと、

「お前に頼みたいことがある。何と、聽いてはくれないか。その代り、お前の命を助けてやるぞ。」

「あり難う！ いや、命を助けて下さるとなら、何んな御用でもしませう。何ですか、お頼みといふのは？」

獵師は、きまり悪げに頭を搔きながら、

『俺は、今、布施の金がなくて困つてゐる。外聞が悪いからな。乃で、お前に頼むのだが、何と、俺が何時も包む、二分の金に化けてはくれないか。すれば、命

子すして
孔すして
うして
うして
ありと
爲し虚しと
爲て
亡うし

は助けてやるよ。』と困り顔にいふ。

『理は急に勢ひづいて、

『化けるのは、私の專業、いと易いことです。命を助けて下さるとなら、何、二分には限りません。外見のいゝやう、奮發して一兩に化けませう。』といふが否、

『理の姿は一變して、一兩の金が頭はれた。』

『獵師は、ほつとして、

『やれやれ、助かつた。』と大喜び！それを手早く紙に包んで、

『ほんの志ばかり……』と和尚へ出す。和尚は、

『あい、あり難う！』と袂へ入れて、その儘、寺へ歸つて行く。

後では、獵師、理の歸るのを、半日程も待つたが、何うしたことか、歸つて來ない。

『はてな！今に歸らない所を見ると、賈せ金が露見したかな。それこそ大變、

俺の首が飛んでしまふ。何しろ氣になることだ。』といふので、そつと様子を見に行つた。

すると、道の傍らに、彼の理が、鉢巻きをし、半死半生の體で倒れてゐる。獵師はびっくり、

『愈々、賈せ金露見だな。大變！ 大變！』といひながら、抱き起して、水をやると、理は、漸く正氣づく。

『何うした？』

『いや、やはや、ひどい目に逢ひました。』と、理は、苦しい息を吐いて、

『貴方が何時も包む通りに、二分に化けてればよかつたのに、少しの外見を飾りたさから、一兩に化けたばかりで、和尚さんは、私を袂へ入れてからといふもの、一寸も放さず、色々と捨くり廻して、この時節柄に、何時もより金の多いのは、不思議ぢや、合點が行かぬ、といつて、果ては指先に力を入れて、摘んで見

◎正直の頭に神宿る……僕

たり、壓えて見たり、爪を立てて見たり、叩いて見たりするので、私は、五臓六腑もひつくりかへり、手も、足も、もうもう、折れてしまひさう、その苦しさといつたらない。既に一命をも失つて、正體を見はさうとしましたが、少しの隙を得て、やうやうこゝ迄逃げ延びて、目を眩してしまひました。僅かな外見からこの苦み、今更ら、後悔に堪へません。又た、貴方にしても、金がなければ、ないで済む。後から寺へ届けても、何の苦情があるのですか。ないものをあり顔して、贋せ金使ひの罪に陥ちるなどは、實以て、馬鹿な話だ。一念の心得違ひから、飛んだことになりました。お互ひに、今後を慎しむとしませうよ。』と涙ながらに語つたとか。

世の小人のする事が、滔々として、皆、これである。それといふのが、貧乏を恥ぢ過ぎるから悪い。宜しく態度を改めて、人間の價值を定める標準が、たゞ人格の如何に在ることを諦観し、貧富以外に超然たるの修養を積むべきである。

5 龜田窮樂の洒落

金がなくて暮される世の中ではない。金を儲けるのはよい、溜めるのはよい。たゞ、その金に執着し、その金に心がこびりつき、その金に使はれるに及んで、弊害が百出するのである。

龜田曳尾は、書を以て鳴り、窮樂の號で、世に知られた。物を物とも思はない曲者であつた。京都の人で、彼の有名な賣茶翁と同じ小路に住んだ頃は、莫逆の交はりを結び、彼れ、茶を飲めば、此れ、酒を飲む。時としては、酒を飲まない賣茶翁が、貧乏徳利を提げて、酒屋へ行くこともあつたといふ。

賣茶翁は、後ち、双ヶ岡の東へ轉居したが、折柄、梅雨、連月に及んで、茶を買ふ客もなく、錢筒、傾盡して、既に食ふ物もなくなつた時、それと聞いた窮樂が見舞に来て、米、錢を贈つた。賣茶翁の謝した偈が、その偈語に見える。

◎おぶち
かめる人をち
かなる師

◎人には
て生くる
者に非す
る者

◎人には
て生くる
者に非す
る者

古句

無茶無飯竹筒空。恰似波臣車轍窮。

多謝特來親賑濟。

簞瓢充得養衰窮。

(茶なく飯なく竹筒空し。恰かも似たり波臣車轍の窮。多謝す特に來りて親しく賑濟するを。簞瓢充し得て衰窮を養ふ。)

身も世も捨てゝゐた賣茶翁も、流石に嬉しかつたと見える。

或る時、大きな酒樽を据ゑ、近所の貧乏人、男女の區別く、呼び集めて、酒を飲ませてゐる。來合せた人が、目を刮いて、

『先生、今日は何ですか?』尋ねると、

『いや、屏風を書いてやつた禮に、酒をくれたから、皆なに飲ませるのぢや。』と答へ、わけの解らない歌などを調つて、大に興に入る。果ては、樽の下から、一封の金を目つけ出すと、

『お、よい下物があつたぞ。』と、一文残さず、一同へ分配した。金錢に淡かつ

たことは、すべて、斯くの通りであつたとか。

その自畫讀に、

味噌搗かず肴難かし米要らず、食はず貧樂酒はちよこちよこ。

又た、「窮樂すきもの」と題して、

煙草、相撲、競馬、錢。酒は、予が糧なれば算へず。

俳諧もやつた。正月の句に、

正月はたゞ幾年も面白し。

うかうかと我が宿へ來る春いとし。

その幼い氣象を見るべきである。

窮樂は、好きな物の一つに、錢を擧げた。蓋し、僞はない告白で、この點に於ては、世の俗人と、何等、異なる所はなかつた。けれど、窮樂は、金に執着しなかつた。一旦、手に入れた金を、惜しげもなく使ひ捨てた所から推して、彼れ

しなて受取は
しなば、
論中語
思はば
命は植す
されず、
はけは
財貨は
命は植す

ニ しならざ者已次を者已◎
リ 惟ざるとれい知たれ人
ン るるべなのでらるの若
グシベから何にはばか何し

亦た、超脱^{て、だつ}の士であつたことが解^{わか}る。

6 鬚剃り志願

金に執着し、貧富、貴賤などいふ物の爲めに、貴重な心を勞するのは、自ら侮るの甚はだしいものである。讀書幾年、幾十年、富貴の地を獲得して、それを成功と心得るなどは、愚昧の至りとしなければならぬ。人間には、もつと尊い仕事があらう。

昔し、反賊が起つて、勢ひ、猖獗を極めた。形勢重大と視た王は、親から征討の軍に臨んだが、容易に平定することができず、却つて、賊の重圍に陥り、あはや、一命を失はうとした時、近臣の一人が王の馬前に躍り出て、獅子奮迅の働きをして、賊を追ひ散し、王を九死一生の間から救ひ出した。

王は、限りなく喜んで、亂後、これに重賞を授けやうとして、

「今度の其方の働きは、實に拔群といつてよい。就いては、何か褒美を遣はした
いと思ふ。所望があらば、遠慮は無要、何なりと申し出よ。」

「何卒、王様の鬚剃り役を仰せつけられたうござりまする。」と、これは又た、意外の所望である。

『それなら、易い事ぢや。』とあつて、王は、その願ひを容した。

「あれ程の手柄を立てたのだから、大臣になるのも、貴族になるのも、それこそ心の儘ぢやないか。乃至、金銀、財寶、莊園、邸宅、何を望んでも、きっとおしがあるものを、賤しい鬚剃り役を志願するとは、何うした了簡だらう？」

『眞實だ、馬鹿な男だ。』と語り合つて、大臣ひどいことをや。

確かに馬鹿はかげてゐる。眞實まつたけ、大笑ひである。けれど、折角磨せっかくみがき上げた心を、區

◎は改つて
には憚るこ
となかれ
孔子

々たる富貴の爲めに費して悔いないものは、より以上に馬鹿げてゐはしないか。
今の人は、到底、貧富に對するその態度を改めなければならぬ。

死者始ず者◎生する
死あり
めある
は終に
楊子法言

第二十二 死 生（その二）

1 小西來山の辭世

人は、超脱しなければならぬ。利害得失、吉凶禍福、すべての運命から超脱して、初めて眞の生活があり得る。超脱は、容易の事ではない。殊に死生から超脱するのは、たゞこれ、達人のみの能くすべき所ながら、心の持ち方次第、何人も死の恐怖を緩めることだけは出来るであらう。

來山は小西氏、十萬堂と號し、俳人で、大阪の南、今宮村に隱棲した。人と爲り、濶達不拘、偏へに酒を好み、種々、奇行のあつた中に、或る夜、醉つた餘りに、變な風をして歩いてみると、目付に捕まり、牢へ入れられた。名も處もいはないので、怪しい者と思はれたのであらう。けれど、門人に尋ね出され、その顛

ひによつて、事なく放免された。

その時、門人が、

『牢の中では、嘸、お苦しかつたでせう?』といふと、來山、

『何、飯を炊く世話がなくて、結句、樂ぢやつた。』

或る年の大晦日に、門人から、元日の雑煮の具を調じて贈ると、

『この頃は、酒一方で、食ふ物がない。好い物をくれた。』といつて、即時、煮て

食つて、

我が春は宵にしまうて除けにけり。

と口號んだ。

蓋し、妻もなかつたと見えて、女人形と題する文中に、「酒を飲まぬは心憂けれど、賢しげに物いはぬはよし。」といひ、「姑は、何處の土ちや。あゝ、現なの妹育物語や。」と筆を止めて、

折ることも高根の花や見たばかり。

文章は、上手であつた。

殊に俳句には、優れたものゝ多かつた中に、「その物を育てんとて、その物を損ふ。」との詞書の下に、

筍を竹にせんとて竹の垣。

とあるなど、その言行に思ひ合せて、俳人といふよりも、寧ろ、老莊者だつたのである。

だから、その辭世も、

來山は生れた谷で死ぬるなり。それで怨みも何も彼もなし。

と、死生を一笑し去つた気持ちが見えてゐた。

げに、死生は、一笑し去るべきである。人が死ぬのは、死の時に死ぬのではな、生れたその時から、時々刻々に死ぬのである。だから、死を悲しむなら、同

時に、生をも悲しむべきである。生を祝して、死を悲しむのは、その意味が解らない。

2 駢馬の價值

死生を超脱するといふのは、生命を粗末にするの意味ではない。一休和尚は、臨終の枕邊へ進んだ弟子が、

『最後のお示しを……』と乞ふと、

『死にともない。』と答へたとか。人間、要務がある。なるべく長壽を保ち、身を健康に持つて、その要務を果さなければならぬ。諺に、「命あつての物種。」といふではないか。人間の愚かさ、我れと我が手に、その物種を枯らすやうな眞似をして悔いないのは如何?

百喻經に見える話。昔し、一人の婆羅門があつた。一日、その弟子を呼んで、

「お前も知つてゐる通り、來月は、大法會を行ふことぢやが、その際の器には、一切、陶器を使ひたい。早速、陶器師を雇つて來い。」と命じると、弟子は、『はい、畏こまりました。』と答へて、早速、市の方へ出て行つた。

時に、一人の男があつて、駢馬に種々の陶器を負はせ、市へ賣りに行く途中、何うしたことやら、駢馬がひんひん跳ね出し、狂ひ出して、脊中の陶器を、一個残らず、打ち碎いてしまつた。氣の小さい男は、餘りのことにつき胸も潰れ、悄然、家へ歸ると、

『あゝ、情けない、殘念な!』とばかり、聲を放つて泣き出した。

通りかゝつたのは、彼の弟子である。それへ入つて、

『何を泣いてなさる?』と尋ねると、男は、涙を拭きながら、『私は、世渡りの方便に、多年、陶器を作り溜め、市へ行つて賣らうとすると、この發狂駢馬めが、忽ち打ち碎いてしまひました。殘念で、口惜しくて……』

と復も泣く。

弟子は、

「ふむ、ふむ……」と聞いてゐたが、何を考へついたのか、はたと膝を打つて、
「何と、この驢馬を賣つてくれませんか。」といひ出した。

「こんな氣の狂つた驢馬を買つて、貴方、仕様がないでせう。私は、殺してしま
はうと思つてゐるのです。」

「何、構はない。少し心組があるのだから。」と強ひて驢馬を買ひ取つて、師の波
羅門の許へ曳いて戻つた。

師は、弟子の顔を見るなり、

「陶器師は、何うした？ 又た、その驢馬は、何ぢや？」

「はい、陶器師の代りに、この驢馬を買つて來ました。」との言葉に、師は、

『何ぢやと？』と少からず驚いて、

『驢馬が陶器師の代りになるか。』

『代りどころですか。この驢馬は、陶器師よりも、數等、優つてをりますので。』

『馬鹿な！ 何うして優つてる？』

『その仔細と申すは。』としかつめらしく、

『この驢馬は、陶器師が、數年かゝつて造り上げた陶器を、忽ちの間に、粉微塵

にしてしまひました。何と大した技倆ぢやございませんか。』との説明に、師は、

且つ呆れ、且つ怒つて、

『馬鹿め！』と叱りつけ、

『忽ちの間に碎きはしやう。百年かゝつても、この驢馬の足から、たつた一つの
陶器でも出来るか。』といつて、弟子の誤解を戒しめたとか。

再び得難い人身を受けながら、その身、その命を打ち碎くべき酒食を愛して、
衛生、保健の道を顧みないのは、この弟子の愚と一般であらう。世間の愚者は、

大に戒心を要する。

過のな生れず、人
は百年も生るもこ
ぎ易し
譯：菜根

◎生き死
にを脱れ
ず道武果に
と知れまら
：古歌

3 赤穂義士の超脫

古への英雄、豪傑は、すべて、死生を超脱してゐた。人間、死を見ること歸するが如きに及んで、初めて震天撼地の大事業があり得るのである。

例へば、戦國の英雄上杉謙信は、夙に宗謙禪師に参じて、悟る所あり、その謙信の名は、禪師の偏諱を取つたものらしく、又た、不識庵の號は、達磨と梁の武帝との問答に、武帝が、

「朕に對するものは誰れぞ？」と尋ねると、達磨は、たゞ一言、
『識らず。』と答へて、少林寺へ去つたといふ、所謂る、達磨不識の公案に起るとのこと。常に家來を戒しめて、

生を必する者は死し、死を必する者は生く。要は、たゞ心志の如何に在り。

◎山川の

末に流れる

みを捨てて
こそ浮
れ：古
歌

能くこの心得て、守持すること堅ければ、火に入りて焼けず、水に陥りて溺れず。何ぞ死生に關せん。予、常にこの理を明かにして、三昧に入れり。生を惜み、死を厭ふは、未だ武士の心膽に非す。

と、説き死ぬ時には、
極樂も地獄も共に有明の、月ぞ心にかかる物なき。
の辭世があつた。

當の敵手武田信玄も、紹喜禪師に参じて、死生一如の理を諦觀し、臣下に諭して、

參禪に別の祕袂なし。たゞ、生死の切なるを思ふのみ。

といつた。遺偈に、

大底還他肌骨好。 不塗紅粉自風流。

(大底還りて他の肌骨好し。紅粉を塗らずして自ら風流。)

赤穂義士の超脫

その悟達を想ふべきである。

その他楠正成は、平生、莊子を愛讀し、又た、雲樹寺の孤峰、大德寺の宗峰二國師に參じて、粗ほ、宗趣を探り、一日、南都に遊び、片岡の邊りで一禪者に逢ふと、これに心要を乞うた。僧の曰く、

『公の名は如何?』

『正成。』と答へると、

『者個、これ、什麼?』と一喝する。正成は、言下に省悟した。そして、湊川へ赴く前日、楚俊禪師に謁して、

『生死交謝の時如何?』と尋ねた。

禪師、

『兩頭、俱に截斷して、一劍、天に倚りて寒し。』

重ねて、

『畢竟、作麼生?』

禪師は、威を震つて、一喝した。正成は、忽ち悟る所があつたとか。

大内義隆は、逆臣陶晴賢に襲はれて、自殺する時、

討つ人も討たるゝ人も諸共に、如露亦如電應作如是觀。

の辭世を詠んだ。平生、玉堂和尚に參じて、幾分悟つてゐたのである。

北條時頼は、夙に禪を宋僧道隆に學び、爲めに建長寺を造つた。又た、最明寺

を造り、削髪して、それへ隠居し、弘長三年を以て卒したが、その時の偈に、

業鏡高懸。三十七年。一槌破碎。大道坦然。

(業鏡高くかかる、三十七年。一槌破碎すれば、大道坦然。)

蓋し、享年三十七歳であつたのである。

時頼の子時宗も、禪を好み、元寇の役に出かける時、建長寺に佛光禪師に謁し

て、

赤穂義士の超脫

◎打ち碎
く氷の下
に水もな
く古
句

『大事、到れり。用心如何?』と問ふと、禪師、

『鳥直に進前せよ。』と教へた。時宗は、威を振つて、喝一喝した。禪師が、

『眞にこれ獅子兒、能く哮吼す。』といふと、時宗は、拜謝して去つたといふ。

古英雄、古豪傑が、斯く、揃ひも揃つて、禪を學んだのは、これによつて、死が成されるものではない。赤穂義士が、彼の難事を成し遂げ得たのも、一同、命を投げ出して事に當つたからである。

義士の棟梁大石良雄の知人には、方外の人が多かつた。曾祖父良勝は、最初、男山八幡の大西坊に入り、僧になる筈だつたのが、十四の時、去つて江戸へ行き、十八の時、浅野家へ仕へたのである。その關係から、良雄の弟専貞は、同じく大西坊へ入つた。

又た、赤穂華岳寺の惠光和尚、同新濱正福寺の良雪和尚、周世村なる大石家縁

◎安禪必
らかし須も
山林を頭を滅
すれば心却
し川禪師
快涼火却心

故の寺神護寺などは、良雄と昵懇の間柄に在つた。中にも良雪和尚は、椿事突發以來、種々、良雄に諭す所があつたと見えて、討入前、右の三和尚へ寄せた書中には、

良雪様、去年以來の御物語、失念仕らず、具さに存じ出し、この度、當然の覺悟に罷り成り、忝けなき次第に御座候。

とある。良雪和尚が、何事を以て良雄に語つたかは、素より不明に屬するが、談の死生問題に及んだとは、疑ひのない所である。

ひとり良雄のみではない。義士の面々、何れも死生を超脱してゐたので、切腹前日の事である、一黨の中、重なる十七人を預かつてゐた細川家の士、接伴係りの堀内傳右衛門が、その詰所に宿直してみると、夜も大分更けた頃、次の室なる富森助右衛門、大石瀬左衛門などが聲をかけて、

『傳右衛門殿、何卒これへ……』といふ。何氣なくそれへ行くと、過半は、既に

◎人生
へより死
かれたり
汗め丹心
取なまし
天祥
文天祥
照る

死

生

四四四

寝んでゐたが、若手の人たちは、火鉢を取り囲んで、正に閑談中である。傳右衛門に會釋をして、

『永々、お世話になりましたが、追つけ、埒が明かうと存する。就いては、お暇乞ひに、藝盡しをお目にかけますぞ。』といつて、大目付長瀬助之進の目を忍び、

屏風の蔭で、助右衛門、瀬左衛門の二人が、歌ひつ、舞ひつ、種々、滑稽な眞似をやる。一同は、大笑ひである。奥田孫太夫、潮田又之丞の二人は、

『御免!』とばかり禱へ入つたが、容易に眠られるものではない。又之丞は、可笑しさを忍びながら、

『あの手合は、時々、あんな騒ぎをしては、皆の者に迷惑をかける。明日は、内藏之助にいつて、手錠を下させませう。』といふ。傳右衛門も、大目付の手前を憚かつて、

『もはや、夜も更けました。お寝みなさるやう。』と断り、詰所へ逃げ歸つた。翌

くれば、元祿十五年二月四日である。義士一同は切腹を仰せつけられ、忠魂、永く天に歸した。死を目前にして、暇乞ひの藝盡しをやるなど、所詮常人の及ぶ所ではない。

又辭世があつた。原惣右衛門は、間喜兵衛は、草枕結ぶ假寐の夢覺めて、常世に歸る春の曙。豫ねてより君と母とに知らせんと、人より急ぐ死出の山路。

富森助右衛門は、

潮田又之丞は、武夫の道とばとばかりを一筋に、思ひ立ちぬる死出の旅路に。先だちし人もありけり今日の日を、終の旅路の思ひ出にして。

早水藤左衛門は、
◎鳥の死なるとする人の聲やん将
◎その言ふ死する人の悲やん將
◎その聲と死する人の死する將
◎鳥の死なるとする人の死する將
◎その聲と死する人の死する將

地水火風空の中より出でし身の、辿りて歸る元の住家に。

大高源吾は、

梅で飲む茶屋もあるべし死出の山。

横川勘平は、

待て暫し死出の遅速はあらねども、眞つ先かけて道しるべせん。

茅野和助は、

天地の外はあらじな草木だに、本咲く野邊に枯るゝと思へば。

何れの歌にも、超脱の趣きが看取される。彼の徒の凡物でなかつたことは、愈々益々明かである。

近くは、西郷南洲の如きも、確かに死生を超脱してゐた。それには、その素があつたので、少壯、無參禪師に参して、禪の宗趣を解してゐたのである。明治六年、征韓論に敗れて歸國し、武村へ隠棲した時のその詩にいふ、

一

山老元難滯帝京。絃聲車響夢魂驚。

垢塵不耐衣裳汚。村舍避來身世清。

(山老元と帝京に滯まり難し。絃聲車響夢魂驚く。垢塵耐へず衣裳の汚るゝに。村舍避け來りて身世清し。)

字々、句々、禪味が溢れてゐる。

だから、南洲の事に當るや、名利を將つて餘事に附したは勿論、常に命を投げ出してかゝつた。明治十年の役は、南洲の本心ではなく、私學校徒に擁せられ、彼等の爲めに、一命を抛つの考へに出た仕事である。無論、成算のあつたわけではない。勝敗を念頭に置かず、勢ひ窮まつて、城山の洞窟に潜み、死期の旦夕に迫つた後も、墓を圍んで、平然としてゐたといふ。その時の詩に、

百戰無功半歲間。首邱幸得返家山。
笑儂向死如仙客。終日洞中棋響聞。

赤穂義士の超脱

(百戰功なし半歳の間。首邱幸め得て家山に返る。笑ふ儂が死に向つて仙客の如くなるを。盡日洞中棋響閑かなり。)

げに南洲は、仙客の心を以て、萬事に當つた人である。

泰平の今日、命を的にするべき出來事は、先づないであらう。けれど、絶無とはいはれない。左と右、死を惜しまない迄に超脱してこそ、人は、能く大事に堪へ得るのである。

すき死◎
蟬の見え
古く句く聲こゑ

第二十三 死 生 (その二)

4 北叟笑み

人間僅か五十年とは、誰れでも知つて、確とは知らない。知らない證據には、なべての人が、千年も萬年も生きるやうな顔をして、名利の途に狂奔しつゝあるではないか。

けれど、人は、到底、死すべきものである。杜甫が玉華宮を詠じた詩に、
 溪回松風長。 蒼鼠竄古瓦。
 不知何王殿。 遺構絕壁下。
 陰房鬼火青。 壞道哀湍瀉。
 萬籟真笙竽。 秋色正瀟灑。

美人爲黃土。

況乃粉黛假。

當時侍ニ金輿。

故物獨石馬。

憂來藉レ草坐。

浩歌涙盈レ把。

冉々征途間。

誰是長年者。

◎美人黃土と爲る
況んや乃はち粉黛の假なるをや。
當時金輿に侍
杜甫詩
○人間告
向い年
臨坂義堂

(溪回りて松風長し。蒼鼠古瓦に竄る。知らず何れの王の殿ぞ。遺構絶壁の下。陰房鬼火青く、壞道哀湍瀉ぐ。萬籟眞の笙竽。秋色正に瀟灑。美人黃土と爲る。況んや乃はち粉黛の假なるをや。當時金輿に侍せしは、故物獨り石馬あり。憂ひ來りて草を藉いて坐し、浩歌して涙把に盈つ。冉々たる征途の間、誰れか是れ長年の者ぞ。)

美人も、黃土に化してしまふ。古來、一人として不死の人のないことを思へば、「冉々たる征途の間、誰れか是れ長年の者ぞ」と問ひたくなる。「人間皆同一年。」である。而も、無常迅速の状は、電光、石火の急なるよりも急で、朝を以て夕を

さへ計られぬ。實に脆い、實に儻ない。

それを思へば、人生の事は、悲しむべき事、多く悲しむに足らぬ。喜ぶべき事、多く喜ぶに足らぬ。

有漏路より無漏路に歸る一休み、雨降れば降れ風吹かば吹け。

である。足を空に、名利をこれ追ふなどは、殆んど正氣の沙汰ではない。

昔し支那の唐の世に、北叟といふがあつた。世に出て、名利を貪る心もなく、私を計つて、財寶を積む思ひもない。都の北に、柴の庵を結んで、身を宿し、麻の衣を着て、寒を防ぎ、草を摘み、菓を拾つて、飢ゑを慰めつゝ、日夜を過し、年月を送り、何か喜ぶべき事を見ても、少しく笑み、悲しむべき事を聞いても、少しく笑むといふ風。といふのが、悲みも喜びも、決して久しいものではなく、夢になり終るべき理を知つてゐたからである。少しく笑むことを、「ほくそ笑み」といふのは、即ち、北叟笑みの意であらう。後鳥羽法皇は、隱岐御配流中、畏

舊事で(樂しん
淫せんす
歸らす)

や今朝見
影の立
夕暮の烟
古歌空

こくも、この古事を思ひ出でさせられて、
何時となく北の叟が如くせば、この理りや思ひ知るらん。

の御製を遊ばされたといふ。

人間心を枯木、死灰のやうにして、一切悲喜する所がないのは、賞むべき
ことないかも知れぬ。禪家に、婆子焼庵の話がある。昔し、一人の婆さんがあ
つた。一庵主を供養して、二十年を経、常に二八の少女をつけて、飯を送り、給
侍をさせた。一日、少女にいひ含めて、突然、庵主を抱へて、
『何なんお心持ち?』と尋ねさせた。庵主は、冷々然として、
『古木、塞巖に倚る。三冬、暖氣なし。』と答へた。

婆さんは、この話を聞くと、大に怒つて、

『ちえツ、二十年間、こんな俗坊主を供養して來たのが口惜しい。』といつて、庵
主を追ひ出した上に、庵を焼き拂つてしまつたのこと。庵主の道心堅固は、異

に歎すべきことであるが、憾むらくは、餘りに人間を離れ過ぎてゐた。これでは
路傍の石、屋上の瓦も同然である。決して望ましいことではない。要は、無常迅
速の世の中、喜ぶべき事にも、多くは喜ばず、悲しむべき事にも、多くは悲しま
ず、常に軽い心持ちで世を渡るに在るのである。

5 佛光國師白刃を嘲る

小さき我れに執すればこそ、生といひ、死といへ、無我の理を悟り、この身を
擧げて、眞如海中の一波とすれば、水の外に波はなく、波の外に水はない譯で、
且にち、生死の別は消え去る。生といへば、死んでも生きてゐるのである。死と
いへば、生きながら死んでゐるのである。死、決して恐るべきではない。笑つて
白刃を迎へることも出来るのである。

事實、笑つて白刃を迎へた人がある。佛光禪師、諱は祖元、字を子元といひ、

◎無と
ふもあ
ら言葉の
無障
はね時
はねと
無と
無なるそ
禪師

別に、無學と號した。宋の明州慶元府の產で、俗姓許氏、父を伯濟、母を陳氏といつた。七歳、初めて書を受け、十二歳、父に従つて一山寺に遊び、偶ま僧の、竹影掃レ階塵不レ動。月穿ニ潭底ニ水無レ痕。

(竹影階を掃うて塵動かす。月潭底を穿ちて水に痕なし。)

の句を吟するを聞いて、些か悟る所があつた。十三歳、父の死に會して、悲嘆已むことなく、杭州の淨慈寺へ行き、北磯簡和尚を禮して薙髮し、服勤五年、去つて、徑山の無準和尚によつた。無準は、狗子無佛性の話を提撕させた。僧が、「狗子、佛性ありや、也たなしや。」と問ふと、趙州和尚は、「無!」と答へた。「一切衆生、悉有佛性。」で、天地間の事々物々、一として佛性を有せぬはない。狗にも、無論佛性はある筈。無とはこれ如何? と工夫させたのである。禪師は、爾來、禪堂に籠つて、體究五年、一夜、首座寮前の板聲を聞き、忽然として省悟した。口を衝いて出た偈に、

一槌擊碎精靈窟。 突出那吒鐵面皮。

兩耳如聾口如啞。 等閑觸着火星飛。

(一槌に擊碎す精靈窟。突出す那吒の鐵面皮。兩耳は聾の如く口は啞の如し。等閑に觸着すれば火星飛ぶ。)

以て、無準和尚に呈した。

斯くて、諸處に諸知識を歷訪し、修行幾年之後ち、故鄉へ歸り、大慈寺の物初觀公によつて、淨持二年、江湖、その操を高しとした。一日、水を汲まうとして井樓へ登り、轆轤を動かす際、廓然として開悟した。時に年三十六。後ち、台州の真如寺を管し、道を説くこと七年、聲光、四方に輝いた。

時正に宋の末で、北の方、元の勢威、日に加はり、德裕乙亥の年には、元兵が潮の如くに侵入した。禪師は、兵を溫州の能化寺へ避けた。元兵は、溫州へもやつて來た。衆は、先を争つて奔竄した。禪師は、獨り堂裡に在つて禪榻に横り、

外の騒ぎも知らぬげに、三昧に入つてゐた。所へ、元兵が突入して、刀を揮つて禪師の頸に擬した。禪師は、神色少しも變せずして、徐ろに偈を說いた。

坤乾無三地卓孤筇。喜得人空法亦空。

珍重大元三尺劍。電光影裏斬春風。

(乾坤地の孤筇を卓つるなし。喜び得たり人空法亦た空。珍重す大元三尺の劍。電光影裏春風を斬る。)

本來空のこの身、斬るも斬られるもない。恰かも、電光の閃めく中に、春風を斬るが如くである、との意であらう。元兵も、恐れ入つてしまひ、懺謝して、他へ向つた。

時に、日本の北條時宗は、父時頼に尋いで、心を斯道に寄せ、幣を具へて、有徳の禪僧を聘請した。禪師は、選ばれてこれに應じ、祥興三年五月發足、六月晦日、太宰府へ到着した。實に我が弘安三年である。時宗、これを郊迎し、建長寺

に置いた。

翌四年、元兵十萬、筑紫へ來襲し、時宗、出陣に臨み、就いて示しを乞うたことは、前にも記した。

後ち三年、時宗は卒した。嗣子貞時、續いて禪師を崇信した。九年八月、病ひあり、九月三日、親から遺書を作つて、貞時以下の故舊、諸檀に訣し、夕刻、偈を示した。

諸佛凡夫同是幻。若求實相眼中埃。

老僧舍利包天地。真向空山撥死灰。

(諸佛凡夫同にこれ幻。若し實相を求むれば眼中の埃。老僧の舍利天地を包む。空山に向つて死灰を撥すること莫れ。)

この夜三更、衣を着更へて端坐し、筆を執つて、來亦不前。去亦不後。百億毛頭獅子現。百億毛頭

難した身きなな玉◎
禪師：知のなしはの極
ろながら外う樂
無べきら生にての

獅子吼

(來れども亦た前ます。去れども亦た後れす。百億毛頭獅子現はる。百
億毛頭獅子吼ゆ)

書し終つて寂す。壽六十一。勅して佛光國師と謚す。禪師、平生、衣を脱いだ
ことはなく、上から物を襲ねて夜分に備へた。その威儀精恪なることは、斯くの
如くであつたといふ。

佛光禪師のみではない。或る僧も、白刃はんじん、將まき
四大本無む主。五蘊本來空。
將首臨ニ白刃。猶如シテ斬ニ春風。

(四大本と主なし。五蘊本來空。首を將つて白刃に臨む。猶ほ春風を斬るが如し。)

と澄してゐた。死生一如の理を悟れば、何人も、この境地に至ることが出来る。

何人も、
身も消えて心も消えて渡る世は、剣の先も障らざりけり。
である。小さき我れに執すればこそ、生の、死のといふけれど、無我の人には、決して死の恐怖がないのである。

6
盆中の蛇

人の恐怖は、死に於て極まる。死、果して然く恐怖すべきものだらうか。
◎色即是空
若心經

佛教では、「色即是空」と説く。色は、千差萬別、窮まりのない、現象界の事々物々のことで、それ等のものは、畢竟、平等一如、何等、差別のない空、即はち真如に歸してしまふ。真如は、宇宙の本體である。宇宙の本體たる真如は、あるといへばあり、ないといへばない、譬へば、虚空の如きもの、乃で、空といふのである。そこには、大小もなく、輕重もなく、色もなく、聲もなく、香もなく、

や冰と隔
つれど隔
落つれば
同じ谷川ば
古の水

味もない。即はち、一切の差別がない。たゞ、人の心がこれを差別と觀するのである。大乘起信論にいふ、

一切諸法は、たゞ妄念によつて差別あるなり。若し心念を離るれば、一切、境界の相なし。この故に、一切の法は、從本已來、言説を離れ、名字を離れ、心念を離れて、畢竟、平等にして變異あることなく、破壊すべからず。

たゞこれ、一心なるが故に、眞如と名く。

と。今少し簡單にいへば、

迷故三界城。 悟故十方空。

本來無東西。 何處有南北。

(迷ふが故に三界城。悟るが故に十方空。本來東西なし。何の處に南北あらん。)

といふわけである。迷ふから、差別がある。悟つて見れば、差別がない。

だから、人がこの世界を差別と觀じるのは、自分の影に吠える犬の愚に似てゐる。差別は、たゞ、心に在るのである。

或る男、他で御馳走になつて、家へ歸るなり、

「あゝ、胸が苦しい。腹が痛い。早く薬を取つてくれ。」といふ。

「何うかしたんですか……おや、顔が真つ蒼だ。何うしまして？」と妻が驚く。

「今、蛇を呑んで來た。」

「えつ、蛇を……眞實ですか。」

「嘘な物か。酒を出されて、盃を受けると、中に蛇が泳いでる。それをぐつと呑んだやつたんだ……あゝ、苦しい。早く薬を……」

「まあ、大變な事をしたんですねえ。」

と、妻も蒼くなつてしまひ、額へながら薬を取ると、夫は、それへ横になつた切り、頭も得擡げず、悶へ苦しむ。

◎心迷心こそ
心迷なれはす
心迷なれ心迷
古歌

醫者よ、藥よと騒いだが、その效なくて、病氣は、日に日に重くなるばかり。
先方の主人、この話を聞くと、氣の毒ながらも、
「盃の中に、蛇が泳いでゐたなどと、そんな馬鹿なことはない。何を思ひ違へた
のだらう?」と、種々考へた末に、はたと膝を打つて、早速、見舞つた。
そして、

『蛇を呑まれたとかで、つひ、氣もつかずゐたが、飛んだ事だつた。然し、私
の家に、いゝ藥があるから、それを服めば、直ぐ癒る。心配するには當らない。』
『然うですか。是非、頂きたいもので……』

『上げるよ。たゞ、困つたことには、服みに來てくれないぢや……』

『服みに? ……何しろ、この容體ですからね。』

『駕籠でいも來ればいゝ。』

『成程! では、伺ひませう。』と、早速駕籠を僦つて、それに乗り、腹を撫で撫

◎駕籠か

で、從いて行つた。

先方では、主人自ら、

『さ、これをお服み!』と、何時かの盃で、藥を侑めた。

『あり難う!』と手に受け、服みにかゝつて、

『おやツ!』とばかり、その盃を投げ出した。

『何うした?』

『蛇がゐます。』と顎へてゐる。主人は、笑ひながら、上の長押を指さして、
『あれを御覽! こんな小さな盃の中に、蛇のゐやうわけはない。長押のあの弓
が映るのだ。』との言葉に、此方は、稍暫らく、弓と盃とを見比べてゐたが、忽ち
横手を拍つて、

『ナール程!』

同時に、病氣も、けろりと癒つたとか。

◎正化け物
の花たり枯尾古見

蛇は、どこにもゐなかつた。たゞ彼の心中にゐた。差別は、物それ自身にありはしない。これ亦た、人の心中にのみ存在するのである。

萬物が、平等一如に歸するならば、人もなく、物もない筈。彼もなく、我れもない筈。従つて、生もなく、死もない筈である。

佛教の要は、この、我れのないこと、即はち、無我の理を悟得するに在る。親鸞上人も、「佛法には、無我と仰せられ候……ゆめゆめ、我れといふことあるまじく候。」といつてゐる。差別をつけて我れといふその我れは、これ亦た、妄念の所産で、豁然として大悟すれば、我れは、直ちに、眞如の平等界中へ還沒してしまふ。男波、女波、大波、小波と種々の名で呼ぶけれど、大觀すれば、漫々たる大海の水に歸する。それと同じことである。この理を諦観して、心身脱落、

左や右と企みし桶の底抜けて、水溜らねば月も宿らず。
の妙境に達するのが、佛教の根本義とする所である。

◎本心を
知れば
古歌に
現び
在に
物

らしいひなが
清えけり
古歌

無外禪尼、初めの名を千代野といふ。城陸奥守の女で、金澤越後に嫁した。中年、夫に別れると、哀戚の餘り、心を禪に寄せ、佛光國師を禮して、髪を削り、名を如大と改め、別に無着と號した。一夜、月明に乗じて水を汲みに出た歸さ、桶の底が抜けて、水を零した。乃はち大悟して詠み出したのが、右の歌である。

佛光の印可を受け、京都の北に最景寺を創めた。今の眞如寺、それであるといふ。永仁六年十一月二十八日化す。壽七十六。

既に心身脱落の妙境に達し得て、我れといふものがなくなれば、又た、我れの死もない道理、その人は、無始の始めから、無終の終りに亘つて、常に生き通しある。火にも焼けず、水にも溺れぬ。その生は、死の如く、その死は、生の如くである。こゝに至つて、死、決して恐怖すべきものではない。

死 生

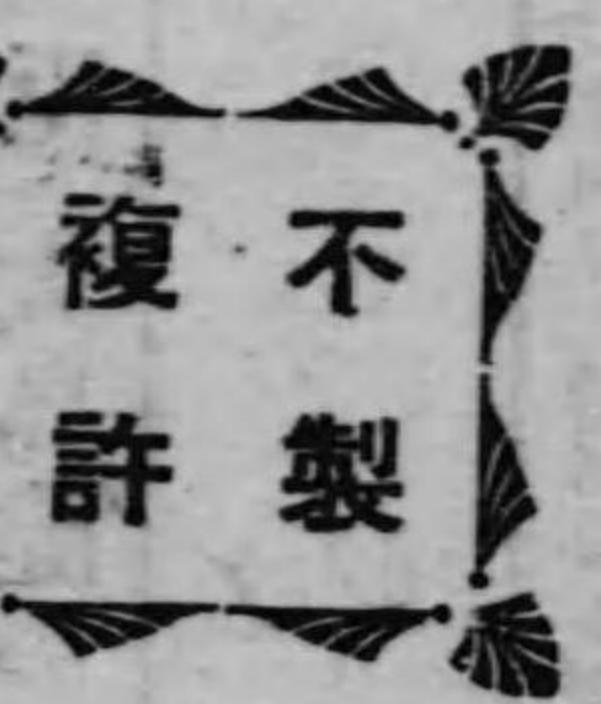
四六六

對照
格言
修養百譚終

大正七年十一月廿五日印刷
大正七年十一月三十日發行

修養百譚
正價金圓五拾錢

著作者 山田愛劍



東京市神田區今川小路二丁目十四番地
發行者 高倉嘉夫

東京市神田區今川小路二丁目十四番地

印刷者 田原嘉

東京市神田區今川小路二丁目十四番地

印刷所 忠誠堂印刷部

忠誠堂印刷部

複許

不製

發行所

東京市神田區今川小路
九六六番地
總售處
東京二〇四三一號

合名忠誠堂

◀著名三の朽不▶

陸軍大將男爵 福島安正閣下題字
陸軍次官 山田隆一閣下題字

格言 訓話 日日の修養

七十

五版

總クロース製美本
菊半截八百五十頁
正價金壹圓五拾錢
錢八料送

名著中の名著なり本書を併せさし日日に一章を熟讀して日日に一徳を獲得せば玲瓈透徹玉の如き人格を得るこ
と亦難きに非らざるべし切に萬人の必讀を望む
陸軍大將男爵 神尾光臣閣下題字
陸軍大臣 大島健一閣下題字

杉田定一閣下題字
孤峰學人先生著
三十
七版
總クロース製美麗
菊半截八百五十頁
正價金壹圓五拾錢
錢八料送

學人道

道

碎けたる修業談仙に比類なく適切なる例話巧なる比喩最も可なり一度本書を繰けば恍然として頭を解きつつ能
く道徳の大本底世の眞諦を悟得すべし
男爵 滋澤榮一閣下題字
男爵 森村市左衛門閣下題字

鈴木魅先生著
四十
八版
總クロース製秀美
菊半截三百三十頁
正價金八拾錢
錢六料送

精神道歌物語

道

歌
四十
八版
總クロース製秀美
菊半截三百三十頁
正價金八拾錢
錢六料送

▼山田愛劍先生著

道歌は古來先哲の風範が沿承して三十一年となれるもの言體として遺長く首々二聲三嘆・妙あり道歌の精神
は古來先哲の風範が沿承して三十一年となれるもの言體として遺長く首々二聲三嘆・妙あり道歌の精神



終

